

日米開戦70年

可視化された「バターン」の虚構

溝口郁夫

近現代史研究家

証拠写真付

「死の行進」なのに

本郷美則

評論家

なぜかティーンタイム!

撮影・佐藤英明

戦争画研究のプロセスで炙り出された、フジタ叩きの異様と「バターン死の行進」のウソ……開戦70年目にして見えてきた「あの戦争の真実」!

GHQが抹殺した本と絵画

本郷 溝口さんのご著書「絵具と戦争」、非常に面白かった。特に、世界的な高い評価と裏腹な、日本画壇における藤田嗣治つぐはるの位置づけと、その批判者の思想的スタンス、そして「バターン死の行進」の虚構がよく抉り出されています。



ほんこう よしのり

1934年、北海道生まれ。59年、早稲田大学政経学部卒業後、朝日新聞社入社。94年、退職後、文章活動に入る。著書に「新聞があぶない」「隠すマスコミ、露されるマスコミ」(以上、文春新書)「首都壊滅!—東京が核攻撃された日」(ワック)など。

※巻頭カラー「戦争名画」特集をあわせてご覧ください



みぞぐち いくお

1945年、鹿児島県生まれ。北海道大学工学部卒業後、八幡製鐵入社。新日本製鐵退職後、南京事件、ヒルマ独立義勇軍などを研究。GHQの没収した図書を集集調査・データベース化し、「GHQ焚書図書開封」(徳間書店)の編集協力、一部執筆を行った。著書に「南京事件「証据写真」を検証する」(共著・草思社)、「絵具と戦争」(国書刊行会)がある。

溝口「絵具と戦争」というタイトルではありませんが、GHQが行った「焚書(書物を焼き捨てること)」について、日本人に本当の歴史を知らせようという思いがありました。

GHQは戦後、戦前に発行された画家たちが書いた従軍記をふくめ、数多くの本を焚書にしました。七千七百余の本が没収の指定を受け、ア

メリカに運ばれています。当時、この事実をほとんどの日本人が知りませんでした。現在も知る人は多くありません。

焚書された七千七百余の本を、国会図書館のデータベースで一冊一冊調べたことがあります。その結果、八九%まで本の存在を確認できました。残りは確認ができませんでした。

本郷 藤田嗣治や向井潤吉、宮本三郎などが描いた「戦争画」も、アメリカに持ち去られていますね。

溝口 そうです。焚書の指定が始まったのが昭和二十一年三月から昭和二十三年三月まで、そして、戦争画がアメリカに持ち去られたのが昭和二十六年七月です。百五十八点(『太平洋戦争名画集』)の戦争画が海を渡り、約二十年後の昭和四十五年、百五十三点の作品が「無期限貸与作品」として日本に戻ってきています。

戦後、戦争画を描いたことで、「戦争責任」のやり玉に挙げられた藤田嗣治の作品が最も多く、うち十四点あります。

本郷 藤田と言えば、乳白色の肌の女性を描いた作品や猫の絵で有名ですが、戦争画の大作も数多く残しているんですね。これらは作品の芸術的な素晴らしさもさることながら、

「戦争記録画」として「民族の遺産」とも言えるものですよ。しかし、今やほとんど顧みられていない。それどころか、その存在さえもあまり知られていません。

そもそも、この本を出版されたきっかけは何だったんですか？

溝口 実は本にすることなど頭になかったんです。藤田の戦争画と、戦後藤田が日本社会から追放される過程に興味があったものですから、調べたことを書き溜めていたんです。

そして、私も編纂へんさんに関わってきた西尾幹二先生の『GHQ焚書図書開封』シリーズのどこかに入れてもらうと考えていました。そうしたら、西尾先生が「これは別個の本にしたほうがいいよ」と出版社を紹介してくださったのです。そういう意味ではこの本も、『焚書図書』シリーズの一つなんです。

本郷 藤田は戦争画を描いたことで戦後の日本社会から干はされてしまえますね。そして昭和二十四年、彼は日本に見切りをつけて、アメリカに発ちます(註 翌昭和二十五年にはフランスに渡り、亡くなる直前まで過ごす)。六十九歳でフランスに帰化、七十三歳のときにはカトリックの洗礼を受けて、「レオナルド・フジタ」と改名します。そして最後はスイスの病院で一九六八年一月、八十一歳で亡くなる。その失意の胸中は、いかにばかりだったでしょうか。

「捨てられたのだ」

溝口 「私が日本を捨てたのではありません。捨てられたのだ」という藤田の言葉が残っています。敗戦という国家の運命が、藤田の運命も変えました。本郷 かつて藤田は『随筆集 地を泳

ぐ』にこう述べています。「私はフランスに、どこまでも日本人として完くわん成すべく努力したい。私は世界に日本人として生きたいと願う。それはまた、世界人として日本に生きることにこにもなるだろうと思う」。陸軍軍医総監(前任は森鷗外)の父親をもつ藤田ですから、当然父親からも「日本人として立つ」薫陶を受けていたでしょう。その藤田がフランスに帰化したわけです。それぐらい、戦後日本における藤田叩きは異常なものでしたね。藤田を戦犯せんぱいに陥れて、画壇から無きものにしようとしたわけですから。溝口 藤田ひとりがスケープゴートにされたと言っているでしょう。昭和十二年五月の第一回海洋美術展(海軍省後援)を皮切りに、陸軍・海軍ともに、戦意高揚を目的とした一般国民への戦争画展示を精力的におこなっています。



「絵具と戦争」国書刊行会
2100円(税込)

藤田も、漢口攻略の最前線まで従軍しています。藤田以外にも、鶴田吾郎、中村研一、小磯良平、向井潤吉、石井柏亭、石川寅治、田辺至らが、それぞれ海軍・陸軍の要請で前線へ赴いていますし、文学者では、久米正雄、岸田国士、林芙美子、菊池寛、吉川英治、吉屋信子らが大陸へ従軍しています。

本郷 私の古巣の朝日新聞も、昭和十三年五月に戦争美術展の主催をしていますし、翌年七月には陸軍美術協会による第一回聖戦美術展を後援している。戦争画の紹介・称揚ということでは、朝日新聞の役割はきわめて大きいんですよ。頻繁に主催の後援だのをやっている。朝日は、今もう一回やったらいいんだ(笑)。

戦争中に、新聞社が反軍的な姿勢を取れるわけがないんです。それに軍に協力することは国を守ることもなった。それは素直に評価すればいいんですよ。

「戦争記録画」「戦争画」というのは、ヨーロッパでは、その戦争にその国が勝っても負けても、ちゃんと社会に受け入れられていますね。あったままのことを、あったままに、その当時の気持ちで描いたものに対しては評価をきちんとするんです。これ

が本当の歴史記録への評価ですよ。

アメリカから戦争画が返還されても、絵は東京国立近代美術館の奥にしまいっぱなしです。幸い、私は藤田の戦争画を何点か実際に見ているんですが、あの作品を日本国民が見られないのは、大きな損失です。

溝口 おっしゃる通り、「民族の遺産」ですよ。正当な美術的歴史的評価を願うばかりです。

私がこの本で取り上げた戦争画は、支那事変以降の七、八年間の間に書かれた戦争画ですが、これ以前にも、日清戦争、日露戦争と、戦争にまつわる戦争画はいっぱい描かれています。藤田に問題があったとすると、日清・日露戦争に従軍した絵描きたちにも問題がある、ということになる。この七、八年の期間だけを取り上げて糾弾するのは、おかしいことなんです。

しかし、最近になって、やっと藤田嗣治を前向きに評価した本が出るようになりました。ここ四、五年です。いい方向に向かっていると期待しています。

本郷 まったく。

溝口 絵の専門家、とくに自分も絵を描いている人たちは、おしなべて藤田の戦争画を物凄く評価しています。「藤田でないと描けない」と。

戦後、藤田を「職人だから何でも構わず書いた」なんて貶めて論評する人もいましたが、あの国際人をつかまえて、「世界情勢がわからない」などとんでもありません。

宮本三郎や、仲間だった向井潤吉などの絵描きたちは一切、藤田についての批判を口にしませんでした。一方で、「美術評論家」と称するようないくつかの人は、思想的な影響もあってか、今でも藤田を評価してい

ません。

藤田を批判したひとり、針生一郎氏（文芸・美術評論家）の一文にもそれが表れています。（藤田の「アツツ島玉砕」は10〜11ページ参照）

藤田の《アツツ島玉砕》もまた、両手に軍刀と小銃をもち、片足にまで小刀をはさんで獅子奮迅する山崎部隊長の軍装姿を、鏡の前で自演してみずから恍惚となりながら描いたものらしい。この絵は一九四三年の国民総力決戦美術展に出品され、同年の《血戦ガダルカナル》とともに一億総蹶起をうながす感動的な名作として新聞雑誌に掲載された。だが、当時右翼的學生だったわたしはその図版を見て、これは「わるい、わるい」絵だと直感した。荒涼とした北海を背景に、どす黒い肉体と死骸がはげし

くもつれあい、銃剣をふりかざして米兵におそいかる日本の将兵の中央で、山崎部隊長が八面六臂ともいうべき激闘を続ける。懐憎苛烈な殺しあいの光景をこれでもか、これでもかとばかり描きこみながら、作者の魂はまったくここに関与していない。彼は野次馬の嗜虐的な興味に駆られてこのむごたらしい場面を描きながら、その効果をニヒルに、偏執狂的にたのしんでいるだけだ。しかも、それによってこの絵は、戦争末期のデスパレートな心情に通ずるものがあつたのだ。敗戦後に戦争画家はだれひとり、このような荒廃した内部をみつめて、そこから再出発しようとはしなかったし、批判者もまた戦争画家と抵抗画家の機械的な分類にすがって、この地獄の悦楽にまで下降しようとはしな

かった(『戦争と美術』平成十九年、一四四頁―一四五頁)。

本郷 ひどいですね、これは!

溝口 「美術を愛する人」の文章ではありませんね。真の美術評論家はこんなこと書きませんよ。「絵を評価する」「時代を評価する」という視点ではなく、「自分の思想から評価する」という視点です。調べてみると、針生さんという方は戦後、日本共産党の党員でもあった人で、多摩美術大学の教授にもなっています。

本郷 朝日新聞の文化欄にもよく登場していましたね。画家の内田巖いわおなんかもそうだ。当時はマスコミの寵児じでしたね。

溝口 戦後、あらゆる業界で、それまで要職にあった人がパージ(追放。特に公職から追放すること)され、そのあとがまに左翼系の人間がおさま

りましたが、その構図が美術の世界でも起こっていたということですよ。今回この本を書いて、「今でもまだそういうのか」という思いがします。

本郷 朝日新聞内でも戦後、同じことが起きています。混乱に乗じ「敗戦革命」を志した連中がいた。

溝口 針生さんのこの文章は平成十九年発行の本に書かれたものです。戦後六十年以上たっているにもかかわらず、彼はいまだに「戦争責任追及者」として、藤田を糾弾しています。

「みずから恍惚となりながら描いたものらしい」「わたしはその図版をみて、これは『わるい、わるい』絵だと直感した」「作者の魂はまったくここに関与していない」

「らしい」「直感した」という表現もさることながら、「作者の魂はまったくここに関与していない」なんて、藤田の絵を見れば、素人でも「それは違う」

と分かることですよ。それに、画家が絵に魂を入れられないなんてことがあり得るんでしょか。この評論は、針生さん自身を貶める、恥ずかしい文章の典型になったと思います。

宮田重雄の藤田批判

本郷 藤田が「戦争協力者」と批判される引き金を引いたのが、軍医であり自身も絵を描いた宮田重雄です。彼が朝日新聞に投書した「美術家の節操」という一文がそれですね(昭和二十年十月十四日)。しかも、新聞記事を鵜呑みにし、事実と誤認して、藤田らを戦時中は軍部に、戦後は進駐軍におもねる、「茶坊主画家」と罵っています。宮田は藤田と同じころにパリに行っていますが、私に言わせれば宮田は「日曜画家」ですよ。

溝口 確かに絵はうまくない(笑)。

藤田とは雲泥の差です。

G H Q 自体は、「美術家」の戦争責任など考えていませんでした。にもかかわらず、宮田の投稿した「美術家の節操」には、歴史の大転換に便乗して、言わば「負け」に乗じて藤田を陥れようとした企みがうかがえます。

宮田の寄稿文には、当時の日本に俄かに増えた「進歩的文化人」の臭いがぶんぶんします。いわゆる「日本の戦争犯罪」の論調を代弁する内容です。

〔鉄筆〕美術家の節操

◇新聞の報ずるところによると戦後都民の文化的慰安を兼ね、進駐軍に日本美術を紹介するために油絵と彫刻の会を開催するといふ。その企画自身はまことによろしい。がその油絵を斡旋する画家たちの名前を見て、啞然たらざるを得なかった者は私だけであらうか。曰く藤田嗣治、曰く

猪熊弦一郎、曰く鶴田吾郎。これ等の人たちは人も知る、率先、陸軍美術協会の牛耳を採って、戦争中フアシズムに便乗し通した人たちではないか。

◇まさか戦争犯罪者も美術家までは及ぶまいが、作家的良心があらば、こゝ暫らくは筆を折って謹慎すべき時である。今更どの面下げて、進駐軍への日本美術紹介の労なぞがとれるか。生きて行くために、長いものには巻かれろとばかりに、軍に追従した群小画家たちは恕すべし。芸術至上の孤壘を守つて、戦争画を描かなかつた画家たちを、非国民呼ばはりした者は誰たちであつたか。

◇自分の芸術素質を曲げて、通俗アカデミズムに墮し、軍部に阿諛し、材料その他で、うまい汁を吸つた茶坊主画家は誰だつたのだ。その連中が舞台が一変すると、厚顔にも衣裳

を更へて、幕開きに飛び出して来る。その娼婦的行動は、彼等自身の恥ばかりでない。美術家全体の面汚しだ。

◇また同記事によると、美術批評家協会が陳列作品を厳選するといふ。借問す、批評家諸君は、作家の節操についてなんと考へてゐるのか。それともアメリカを迎へる浮川竹(註遊女)のつとめの身なのか。新日本の出発のために、芸術家の負ふべき使命は大きいのだ。須らく節操あるべし。(宮田重雄寄)

本郷 宮田は戦後、みごとに「変身」しましたね。

溝口 戦前は、「文化奉公会」の一員として、画集『戦線點描』に協力もしていましたから、立派な「戦争協力者」ですよ。宮田には藤田への羨望と嫉妬もあつたでしょう。藤田は当時、国際的な評価を勝ち得た唯一人の日

本人洋画家でした。宮田は無名に近い。本郷 彼は戦後、NHKの有名なクイズ番組「二十の扉」の解答者もやっていたし、映画「青い山脈」には役者としても出演している。時代の変化にうまく乗りましたよね。

溝口 渡部昇一さんのおっしゃる「敗戦利得者」とは、まさに彼のことでしよう。

本郷 しかし、「美術家の節操」に関して、これは事実と違っていて、あとで藤田と鶴田に見事な返り討ちにあいますね。

溝口 宮田の投稿に対する藤田・鶴田の反論を、後日朝日が載せています。これに関しては、当時の新聞は立派だったと思いますよ。現代だったらまずあり得ない。

●藤田の反論

◇過日本欄に投稿された宮田重雄君

の「画家の節操」と題する一文は、全然事実に相違した同君の軽率さと無責任なる態度とに、起因するものであった。これは宮田君も認め私と猪熊君とに宛て、謝罪の手紙が来た位で、私自身の気持はすでに晴れてゐる。然し真実が正しく認められなければならぬ点と宮田君の文章が全画家の問題にふれて居る点とに対して私は敢てこの一文を書くわけである。

◇此展覽会に關しては私も猪熊君も少しも関知してゐない。主催者より何の相談も無く兩名の姓名を無断で使用した無責任なジャーナリズムの誤報の被害者に過ぎない。これは開催された会場に私達の作品を発見出来なかつた事で解る筈だ。又戦争中便乗したりうまい汁を吸つたり等の同君の邪推は全然的はづれである。元来画家と言ふものは眞の自由愛好者であつて軍国主義者であらうはず

は断じて無い。偶々開戦の大詔が渾発せらるゝや一億国民は悉く戦争完遂に協力し画家の多数の者も共に国民的義務を遂行したに過ぎない。尚多くの犠牲を払はされたものも、かうした画家連であつた。現に猪熊君を始め多くの友人等は今日も尚健康を害して居り、材料の点に於ても手持ちの得難き資材をこのために惜しまなかつた実情であつた。

(中略)

◇戦争中国家への純粹なる愛情を以て仕事を成した画家は勿論、凡ての画家も今敗戦の事実^{すべ}に直面し、心から謙讓と良心とを以てその敗因を正視し反省し、軍官によつて成された世界觀とその指導との誤れる今日迄の国家の方針を一蹴して世界平和と眞の美への探求を研め、精一杯の勉強を成さねばならぬと思ふ。かうした意味で各国との芸術交流によつて

日本文化の純化向上に努力する事を私は切望する所以である。今こそ正しき良心を以て我等画家は須く日本への愛情を世界への愛情と一つに結ばねばならぬ。(藤原嗣治奇)

●鶴田の反論

◇戦争に便乗したからと云つてをられるが、去る八月十五日停戦前までの殆ど凡ての日本国民は戦争の為に軍と政府に協力し協力させられたのではないか。又協力することが当然ではなかつたか。また戦争画を描いた画家が再び平和に戻つたから他の方面を描いては節操を曲げたといふのも間違つてゐる。吾々は画家である。描きたいものは何でも描く、吾々は思想運動家ではない。

る以上当然ではないか。戦争に要するところの凡ゆる兵隊服を着た復員の人々が、停戦後平和産業に転換するが故に是等の人も節操を変へたということにもなる。美術家一部のことはなく、日本自身が大転換したのである。この問題は必ず起きると考へてゐたが、一切は時が正当な解決をして行くだらう。

溝口 宮田は一時期、藤田と同じく溝口にいました。当時の写真で藤田と一緒に写っているものも残っています。彼が書かされたのか、それとも、そういう心情に染まっていたのかは分かりませんが、本当に美術の友達だったら、こういう文章は書きません。本郷 私が若いとき、こんなことを先輩から言われました。「音楽家や絵描きの前では、絶対に同業の人間を褒めたりするなよ」と。彼らは実は物凄く女々しいんですよ。それが宮田にもあつたと思います。

評価されるのは「原爆の絵」

溝口 美術評論家で多摩美術大学教授(当時)の米倉守氏は、思想家の保田與重郎が戦後に書いた大著『日本の美術』を引用して、藤田に関するこんな評価を紹介しています。

今度の戦争のあとで、藤田嗣治画伯をフランスへ追いやったことは、わが画壇一部にその責任があると風聞されてゐるが、同時代人として、これほどみじめで恥しい話はない。芸術家の陥りやすい弊害、そのゆえに最も警しむべき悪徳は、羨望嫉妬である。名声に対する複雑な欲望と、それに達成しやうといふ浅はかなたくらみである。



本郷 藤田が凄いのは、西洋の絵の中にはなかった領域を国際的に確立したことですよ。

溝口 そういうことですね。藤田はもともと日本画も数多く描いているくらいで、日本画的な描写を西洋画

に取り入れたんです。

本郷 とくに藤田の戦争画は、精神のほとばしりを感じますよ。

溝口 「魂が関与していない」なんて

大嘘で、魂が入りすぎているんです。

本郷 鬼気迫るものがありますね。特に「サイパン島同胞忠節を全うす」

「アツ島玉砕」の二作品は、見てい

て全身が鳥肌立ちますよ。残念なこと

に、現代では「原爆の絵」を描いた

画家のほうが評価されます。

溝口 その代表が丸木位里・俊夫婦

の「原爆の図」ですよ。あの絵は悲惨

だけれども、地獄絵みたいなもの

です。ありもしなかった「南京虐殺」も

地獄絵に描いています。

本郷 「被害者」の立場で描いている

んでしょうね。同じ「死」に直面した

人間を描いていても、「生」に向けて

戦う精神の昇華みたいなものがない。

ただ藤田の絵にはそれがある。見

ていて涙が出てきますよ。

溝口 「シンガポール最後の日」を見ても、兵士の姿をこんな風に表現で

きる絵の力というものは凄い。この

絵の資料となった写真も存在します

が、絵の方が格段に素晴らしいんです。

「バターン死の行進」の虚構

本郷 アメリカがでっちあげた「バ

ターン死の行進」についても、この本

で取り上げていますね。

溝口 アメリカが焚書にした本とい

うのは、当然、アメリカにとつて都

合が悪い本なわけです。そのひとつ

に日本人が書いたフライリピンにお

ける従軍記がある。「バターン死の行進」

をつくりあげるのに、これらの本が

邪魔だった。ウソがばれるからです。

本郷 溝口さんは、焚書本の『比島従

軍記 南十字星下』（向井潤吉著、昭



降伏した敵将校に紅茶をふるまう日本軍(『比軍従軍記 南十字星下』より)

和十七年)を、地方の図書館で探し当てたそうですね。

溝口 この本を見つけたときが、今回の執筆における一番のハイライト場面ですね(笑)。

『比島従軍記 南十字星下』には、「投



ボーカーに興ずる捕虜
(『コレヒドール最後の日』より)

降の敵将校に紅茶の接待」という、アメリカ軍将校に紅茶をふるまっていた場面を撮影した写真が載っています。その写真を見ると、米兵はまるでピクニック姿ですよ(笑)。軽そう

なりユツクを背負っている。同じ行程を護送のため歩いた日本兵は、背囊を背負って、銃を担いで歩いているんです。また、同じ本には「診療を待つ捕虜の列」という、野戦病院で診療を待つ捕虜の列を撮影した写真もあります。捕虜の体を気遣っている

のがよく分かります。これらは米軍の一部の部隊に向けた対応かも知れませんが、日本軍は米兵を丁寧に扱っていたんです。この事実はもっと知られるべきです。

また、火野葦平(あしへい)が書いた『比島戦記』(昭和十八年)にも面白い写真が載っています。「海水浴をする米兵捕虜」と解説された写真があるんですが、行軍途中、近くの海岸で捕虜たちがぐつろいだ様子で海水浴をしているんです。これはつまり、行軍中

にそれだけの余裕があったということ、また日本軍がそれを許していたということ。戦後GHQが裁いたように、日本軍が、多数の死者を出すような過酷な行軍を捕虜たちにも、「敗戦も物かはポーカーに興ずる捕虜」(『コレヒドール最後の日』、昭和十九年)という写真も存在します。

参謀長としてバターン作戦に従事した渡辺三郎氏(陸士三十期)は、「つぐられたる死の行軍」(『昭和史研究所会報』第六十七号、平成十四年)のなかで、次のような回想を残しています。

捕虜は、第一線からサンフェルナンドまで徒歩で行進し、そこから汽車で、オードネルに送られた。この徒歩行軍が「死の行進」と喧伝して騒がれ、本間將軍抹殺のキャッチフレーズである。

このとき、護送に当った日本兵は背囊を背負い、銃をかついで歩いたが、捕虜は水筒一つの軽装であった。全行程六十五キロあまり、それを四、五日がかりで歩いたのであるから、牛の歩くに似た行軍である。

夜は肌寒さを感じることもあるので、日本兵は彼らのために焚き火をし、炊き出しをして食事を与え、それから自らも食べるといふ苦労を重ねたのであった。

これを「死の行軍」と呼号することは、軍人のいふべき言葉ではなく、同じく行進をした護衛役の日本兵に対する侮辱であり、戦場ないし作戦の実相を無視したものである。



海水浴をする米兵捕虜(『比島戦記』より)

投降兵のなかには、米軍とともに戦ったファイリピン兵も交じっていますから、彼らも同じ行程を行軍しています。彼らも海水浴をしたでしょうね。

また、バターン攻略戦に参戦した山田光治氏（京都第十六師団司令部部員、一等兵）の書いた『初年兵の初陣覚書』（平成十八年、私家版）には、次のようなエピソードがあります。

戦争終結と共に、野から山から湧き出て来た米比軍の元気で陽気な姿というものは、まるでオリニックが終了した後のピクニック気分のようなもので、およそ捕虜などという陰鬱な姿ではなく、どうしてあれが「死の行進」になったのか、不思議でならない、捕虜の護送といっても、百名か百五十名に一人の日本兵が監視兵と

して一緒に歩いているだけであり、しかも道路の両側は、同じ民族のファイリピン人である。逃げようと思えばいくらでも逃げる事ができる。マリベレスに立て籠もっていたという七万か八万の米比軍中、目的地のオードネル捕虜収養所に入ったのは五万四、五千人であり、その差が行進中に亡くなったなどとは、到底考えられない話である。

米軍はバターン半島のマリベレス周辺で降伏しました。日本軍はそれらの捕虜を一度東海岸のバラングヘ集めた。その道のりは四十キロぐらいです。おそらく、捕虜が海水浴をしている写真は、ここで撮られたものではないでしょうか。そしてバラングから、目的地である鉄道の駅があるサンフェルナンドまでは六十キロぐらいです。およそ百キロの距離

を、五、七日かけて歩いた。戦後アメリカは、「バターン死の行進」と断じましたが、いつたい米兵はどれだけ弱々しいのか。

本郷 ジャーナリストの笹幸恵さんが、同じ行程を実際に自分の足で辿っています（「バターン死の行進」女一人で踏破）『文藝春秋』二〇〇五年十二月号）。彼女はこの道のりを四日間かけて歩き、「栄養失調気味の私ですら踏破できた」と感想を述べています。決してばたばたと捕虜が死んでいくような過酷な行程ではなかったんです。

溝口「バターン死の行進」が「あったあつた」という人は、『比島従軍記 南十字星下』や笹さんの本を読んで、それから発言してほしいですね。

本郷 世界に通じる藤田らの日本の「戦争名画展」をどこかが主催しないものでしょうか。